

発 達 20 (344~351)

座長 今川峰子・柴田良一

- 344 平面図形の回転方位に関する固定と表示能力について
大阪大学 橋本憲尚
- 345 図形認知の発達の研究
——逆立認知について——
大阪市南港幼稚園 坂越孝治
- 346 多義的な写真の認知の発達 (Ⅸ)
——多義的な要素からの短文の構成との関連——
日本総合愛育研究所 柴田良一
- 347 空間認知の発達に関する縦断的研究
(第1報告)
聖徳学園女子短期大学 今川峰子
- 348 児童の方位の理解に関する研究
倉梯第二小学校 品田正明
- 349 Cognitive Map の形成過程に関する研究
高知大学 加藤義信
- 350 イメージと感覚運動による地図道路の跡づけ
静岡大学 弓野憲一
- 351 投影行為の発達
——視点移動にともなう座標変換ルールの抽出——
長崎大学 城仁士

質疑応答

344: 今川からの刺激図形は具体的にはどんな図形かとの質問に対し、線描された具体物であるとの回答があった。

345: 高橋(京大)からの6才以降鏡映図形の選択が減少し回転図形の選択が増加するのはなぜかとの質問に対し、6才から7才では単なる知覚作用よりも方向性を吟味する概念操作が働いていると考えられる。知覚から思考への移行現象と考えられるのではないかと答えた。弓野より、研究結果は図形の異同判断にイメージを使用できるか否かとの関連があるのではないかと意見が提出された。

346: 中塚(群馬大)からのピンボケ写真の系列から対象を認知する能力と短文の構成能力との間にどのような共通したメカニズムを想定しているかとの質問に対し、多義的な刺激から、明確な全体としての対象や意味の通る短文を構成していくシマを漠然と想定しているとの回答があった。

347: 高橋(京大)の描画の正答基準についての質問に対し、図形の位置関係のみを問題とした旨の、橋本の表1の課題はPiagetの発達段階を準用しているかとの質問に対して子供自身の基準に従って発達段階を分類していると回答した。三浦(漢学園)が描画課題での鏡像関係の誤りの年齢差について質問したのに対し、鏡像関係の誤りは弁別過程で生じやすいのではないかと答えた。また山沢(愛媛大)が図形の提示方向と鏡像の関連を問うたのに対し検討中である旨の回答があった。

348: 松尾(上福岡第三小)の教室内での方位学習の前提はどの質問に対し、方位の相対的關係を明確に指導することが大切と思われると回答した。弓野からの性差についての質問には性差なしと答えた。加藤からは方向音痴性は女性が著しく高いとの報告があった。

349: 松尾(上福岡第三小)よりカーブの多い道路と住宅街のような幾何学的道路との結果の差異についての質問があり、前者も後者同様ほぼ直線として再生される傾向があるとの回答を得た。また中塚(群馬大)の方向音痴性の高い被験者の能力をどのように仮定するかとの質問には、大規模空間での経験の質とそれをmappingする際の基本的空間操作能力の有無などが考えられるとの回答があった。

350: 高橋(京大)から、被験者の到達点の判断は非常に主観的なものではないかとの疑問が出され、道路の形を変えることによって跡づけが省略されることを防いでいるとの回答があった。

351: 中塚(群馬大)より、城の「変換ルール」は子供の側の一貫した誤反応タイプとして記述できるのではないかとの質問に対して、子供の空間的解決方略には自発的に発達する「ルール」があると考えておりこれを強調しての命名である旨の回答があった。また品田からの、イメージと言語との関連をどう考えているかとの質問に対しては、イメージは言語を補強するものとして作用することはあっても、言語はイメージの基礎ではなく、イメージの基礎は対象的行為・操作であると考えているとの回答があり、イメージと言語との関連をめぐって会場との間で意見の交換が行われた。

(柴田良一)